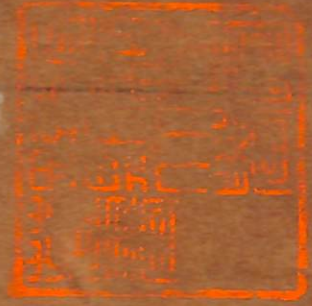


911.3

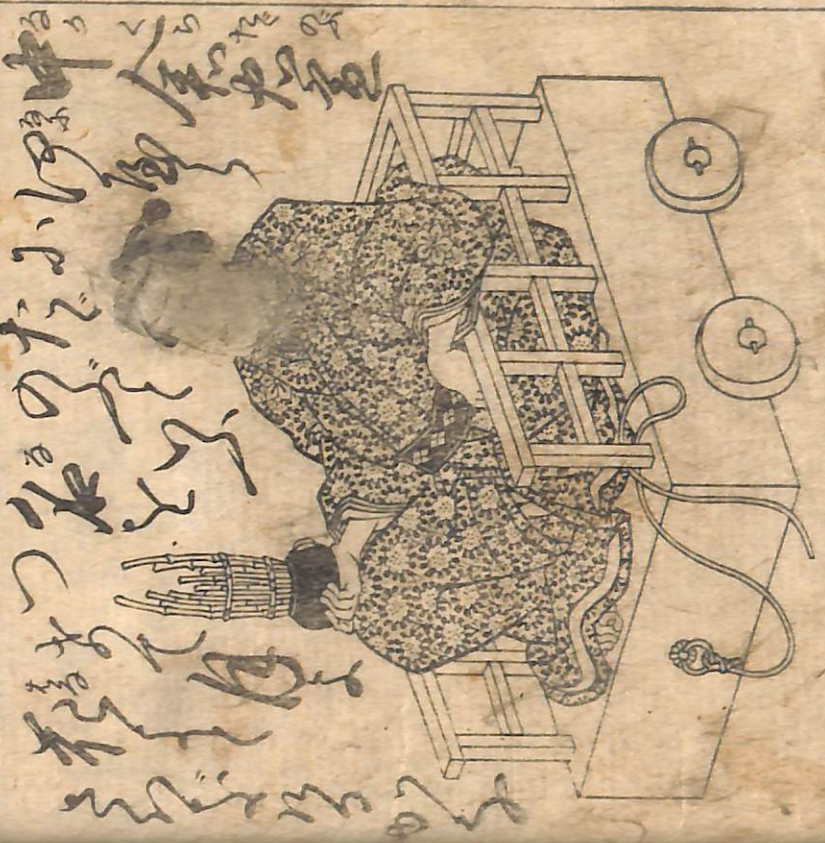
力



Handwritten text in a cursive script, possibly a form or record, contained within a rectangular border. The text is oriented vertically and appears to be a list or series of entries. The script is dense and difficult to decipher without specialized knowledge of the language.



中會志伊勢の人京本登る佳
 猶恐不達上り香道
 性物必は
 金員其人の物
 拾己金東石尾之人中もと氣
 風流志厚之花行葉をま
 家方多く夜清浦川の筆
 葉吹まさふ小夜更をまささ
 其音色空をこの高白くをま
 の夜を重ねるを早日を集る寒を
 系犯を難と言はるを悔むは
 家多く勤進帳をまと興ふを
 ○みの系を食まさるを
 車を求む是の知己の家をを
 廻り金十若十を集め通駕を
 花中之土品地をまとますを
 ○何れの秋辞世を



服部風雪の人俗
 稱彦在傳之江右不事を
 教習之家方未得が後
 非人と言ふ初名を治助と
 ばまら出雲と改む世其蕉の
 人教筆の内其角出雲と並
 上稱せらる其吟ハ
 ○香を大に推乃相子を
 ○蒲を多に推乃相子を
 ○花と風がを多酒の泡
 ○梅一見輪のの車をま
 取りてを其角自きの向
 生涯の名吟を角と鹿
 雲が此吟をまと遠菊の句
 不事を一見



秋色あきいろ 都小細町みやここまぢやうの菓子屋かしや
 の女おんなあり 幼名わらわなを秋と呼あき十才じゆさい
 の時とき上野じやうのへ見みいきて清水しみず観かん
 音堂おんどうの辺へる井いの端はなあり大おほ
 般若へんげと名なづけし櫻うづらをみて
 〇井いのささね様さまあある酒さけの酔よ
 十五才じゆごさいの時とき其角きかくが人ひとととる其
 節ふしの吟ぎん小
 〇蜷なまこの早苗ささな入いるるぶ女おんならね
 其角きかく做号しやくごうと秋色あきいろとああのあかそ
 よの彼かを世よの人ひと秋色あきいろ様さまとああ
 けの且かつて親おやの至孝しこう也なり或時あるとき猪俣しほまた候けい
 能誦よみふめされ折をり園の中の美み系けいる
 る父ちち小洋見こやうみ海うみへと供たもの者ものああ立た
 せ連つらぬけけふ帰かへらら雨降あめふりりか
 秋色あきいろの馬うま出でるる途みち中の子こやや
 ひそふ父ちちをのららめ已いれ雨具あめぐ候けい



深見ふかみ上かみ左ひだり傳でんととる者ものああままああじ
 江戸えどの男おとこ達たちととる者ものああままああじ
 其徒そのとの長ながききゆゆをを死し福ふくをを
 たまたまけけの難がたととる者ものああままああじ
 き曾まで外と諸しよたたととる者ものああままああじ
 翁宗おきなむね因よ江戸えどへへりり門かど人ひとととる
 正ただ其その吟ぎんかり我われ願ねがひひのの枝えああ
 てああののととる者ものああままああじ
 〇名な月つきややままととる者ものああままああじ
 のちのちににててる者ものああままああじ
 後のち剃かりりととる者ものああままああじ
 菴あんととる者ものああままああじ
 所ところ住すむむ〇世よととる者ものああままああじ
 時ときよよととる者ものああままああじ
 小長こながの意い休やすととる者ものああままああじ
 休やすををととる者ものああままああじ



かのさきまういせん
 賣茶翁の肥前久柴山氏月
 海と号し早羊しく薙髪は禪
 法と寄依るを来ゆ者國を修
 行大悟正ありてそれら僧俗
 のありふあを都み出て春の花
 小ありある地秋の紅葉詠よ
 き所を見立自茶道具を
 荷ひ来りて席をまうけく客を
 待周流の輩いよるぶてこそい
 つふおれはく程もあき賣茶の
 名世ふまあるを茶をうる席不
 建たれの文か
 ○茶後の黄金百鎰より半
 文までいれ次第たのこも勝
 たさうのいませやうま



賣茶翁
 おわ
 新江の
 カ
 光

龜田窮樂の京の人世より世ふ
 知る生質地かふる事也賣茶
 翁と同所住て文を深究茶の
 大酒を賣翁の下下るが
 折々の究茶翁は酒買
 不行し奉もありとえ後茶
 系双を置小轉居ても五月雨降
 つき茶奉事もありと包をたる
 時の米とまうおれと是助奉
 もありけり或時屏風書謝礼を
 て大なる酒樽ひとりりて近辺
 男女ぶらいて是どのまきと我も
 共お踊り多し酒と共おりの傘
 両様の下おありと見出し鉢拍子
 せとそ人未もちあな下を生涯
 かのいさきとと正月の吹雪
 年く不歳且は其内の一白り



龜田窮樂
 正
 年
 白

元祖園十良ハ江戸の産父ニ總
 國佐倉多堀越重藏とつる者
 江戸未だ和泉町に住幡隨院長
 兵衛唐大十在備門より男達
 と交とせり多十良生れて七夜不
 わる目上在備の千名と海老花
 とつた方十四才中へ能優と有り
 初名段十良後名十良と改
 能藩と好才磨か門人老能
 号才牛と呼和泉大夫浄雲
 か金平人形のとて工つを見て流
 事とのとて工夫木挽田山村坐
 之凱歌萬歳曾我う五良
 時宗の役にて初て是と勤と有
 代流事とて家の藝とせり
 當時八代連綿る実の能優

水木辰之助元禄の緒人ハ
 巻られ歌舞妓の女形有り
 元禄四年西条より始て江戸
 小下り市村竹之丞坐更檢
 漏猫の所作等と勤め江戸
 戸中あそびと賞美此狂言
 と見ざるをせとせしを其
 角が辰之助へかたり吟小
 ○まよきや緒人のまわる錢を
 とれ若くそ流行しとて思
 ふ一又七変化の所作と有
 のの辰之助よりたまたま
 ○桶巾の飲辰之助を見長
 負おせる富田家と共小間田
 川おあそび時の縁あり

市川
 お牛



久保
 の
 日
 美
 之
 行
 さ

水木辰之助



桶巾
 の
 飲
 辰
 之
 助
 を
 見
 長
 負
 お
 せ
 る
 富
 田
 家
 と
 共
 小
 間
 田
 川
 お
 あ
 そ
 び
 時
 の
 縁
 あ
 り

築傳ハ平林氏宗の築
 庵と云其奈道亦妙を得
 了今安樂甚刻茶と名づる
 物ハ此策傳より延奇言
 俳諧と云之狂歌もよ
 けり兼て洛語の上手也
 其身七十の年醒睡笑題
 一々笑語の書八冊を著す
 今猶世に云まら
 ○本がこれの句ハ其茶寺
 の涅槃會も多し其時の
 吟を時代ハ寛永を盛
 人ハ無一人

安樂卷策傳

本

亭

と

や

福

あけ



露の丑良在仍ハ京都来
 住て低園真島ハ原又
 北野千本松其外洛中の
 祭禮ハ帳の場も亦如て
 辻遊美を説くハ洛語
 等々後者も是今の辻
 かの先祖と云一其ハの
 老若首儀露と云一と
 きてそおけし心匠ま
 已日ハ其笑語と書り
 五冊と云露と云一と
 題せるハ秋の夜社の歌
 此本の奥詠一のり

安樂卷策傳

福

の

夜

社

の

歌



茂睡江戶の人波草小住歌
 学小志一殊く其女輪又和歌
 といふ父子共風流小耽る友
 人の詞一欵と集めて隱室書
 首と題一そ首小

○人老れぬ身よまらまればあつら
 のこむともあはれかればあやて
 已菴の前不利の木のあり
 故人々梨本とらふかか詠け
 ○のがれる世より果一老の身
 隠れまむ山をのり

○あられもの秋の今も真乳
 山聖天の境内に其碑あり
 歌道古学とさるる者此

池田正式(和州郡山の藩主)の
 謙貞徳の風を考へ古今の達
 者其一二句と出ま

○勝を遊ばし花の衣久
 ○庭の秋のそとに試筆か
 其身軽に秋を考へまきせ辺

小近き若所の系ふえとれと
 ちるはきそ○をば小居てるあ
 よのこのつらと吟下たふあ

一う殿の由耳小入花見てまわれ
 とと眼あつらひを収めて若山
 あかちおめがらひら乃一枝

折取て大守(玉産)たてまつる
 けは殿上らるといひて和歌一
 首と題つら

○お酒の若殿まじり家居と
 といふは花千とつらべいとら
 くと用流の主従とつらへ



池田正式



茂睡が女輪の和歌の道不
 達一又琴の妙手も母の世
 を早く太父と只二人暮し
 ける茂睡唱欲とつれ輪
 まふ曲附くと自強くして父
 の徒然とあぐさむ或時恨
 恋とり入る題とよめる歌不

○思ふがよしのやれきう
 うかむ潤よまこせれば
 又行まを惜むあらと
 ○さのちのをもあつて
 消ゆくまやのふるま

重頼の俗文字屋治右衛門
 能登の御前と名直徳小を
 多る此人生得 阪虐を同門
 の人と級父と事多る難
 屋立市池田正式皆不和と
 されとも非活の名譽るり
 ○彼岸とて美舞ふむ花ある
 ○ぬれの指むらむと交拜
 ○秋や九代下屋おるぬか板
 又眞室巳母の道若
 ○教の死の基のわれ佛の存
 とのふをさすしは屋敷のけれ
 不足よりして眞室にも存
 ると後彼人の自異の低ををれ
 ○あまの目まけとやまのひ
 かくにまをなれが眞室
 ○あまの形身がわの文字字
 とのいふくけとあ



茂睡女輪
 見も糸
 のふ
 枝も
 松井重頼



松井重頼
 料理
 後
 梳

隠家共兵衛の寛永正保の
 頃の人実名、山田之丞と吉
 原太右衛門あり時の指女屋を
 生得武藝と好む力衆の勝れ
 宮本武藏の門人より剣法も其秘
 と極む俠客の心あり人の難き
 此必まこと正保二年十月十四日
 尾張町より出火と其火吉原へ
 移る此節の市中皆其苦耳とい
 とて火を消さざるに及ぶ
 後去湯家根を奪り刃を以て
 茅を切落し花名の如く小僧
 云ふ火を消さざる時の官吏遙か
 足とを以て其物と賞美の
 余の火漬りて後名酒一樽甲一
 番とたまの都下有以貞徳
 學んで俳諧とも能くなり



風や
 ほろほろ
 西りり

平内兵衛長盛の方治寛文
 の頃世おきこそ強勇の人
 実兵衛藤氏るがそ妻冬米
 氏を故世の人誤て冬米平内と
 呼或侯小社を少後退身と
 赤坂の木小住夫より浅草の
 地中金剛院の借地まとい金
 龍山老女舟天の前なる平内
 の石像の鈴木九大夫入道正
 三の門小入て仁王坐禅の法と
 修行せし時の形なりとぞ
 ○由りておれの一首の則坐禅
 も修せし時の歌あり



月
 光
 空
 鳴り

立羽不角江戸の人俳諧不ト
 小まゝ又名を千翁と呼も其
 門才千人亦あまれるもの名あり
 享保中法眼不任ぎ此人未を眞言
 師門を合内番の士たわわれて
 ○のんてもくうらぬまね
 かひのほ不角さあま
 ○まの傍の傍り世なるん
 そ脚を毎夜かき事あり
 と老立身の透四男辰角と久
 るさか方の養子とせ小姑の
 氣質むづうそ和浄り
 狐見見しく○煙くももの
 吟せり辰角其句不感ト
 再生は和度り足も生涯睦



茶やと
 好む
 ちぎ

路通の人の事をあらま
 若かりし時放府のあまの人の
 物を所とて近江玉鳥龍
 の林廉ありは芭蕉被園を
 行脚して世辺の茶店不体足
 しく其傍より言非人枕元
 小わり茶碗とるお世のつれ
 品をわい心不審しく云
 かけ風流の話あ及び小扇一
 首の歌あつて芭蕉おきけり
 其書目も又紙から垂下かけ
 ○茶落とるハ則そ秋を夏
 より翁の門人となるて名路
 通と改り難波に住ひけり
 ○山椒の辛く度とる世よか
 ○のめく人あつて年の星も
 其句むよ



茶やと
 好む
 ちぎ

角力の最手とよむれ明石志賀之助と其の友史之彼う京都の角力か
 召を討て後見せ入と同道を合手
 仁王仁太夫志賀之助土儀小入時
 市良兵衛の目今月你が代の暗角力
 えの肩を你殺し我も即坐死
 ろん志賀之助莞尔と笑ひて之會
 一か妙手とて仁王の勝ぬ仁太夫
 の悪者にも志賀之助と殺さんま
 まと聞明石といふ江戸下りせ已
 黒熊子の羽織は金糸赤と早崩山
 明石志賀之助と大文字にぬいせ是
 を看し長き刀と毎買木下り色
 能谷谷立とまぶら冠り相都と夜
 足せし小悪者ともハ是かちをれて
 手とひやくまもりけり

明石志賀之助の友市良兵衛と
 時同く甘角力と名都を合れて
 其は刀力もまもる仁王仁太夫と
 の悪者ともせぬぬ斯て土儀か
 登る時市良兵衛おむりて目我仁
 太夫おむりてまぶら生て土儀あるが
 らん志賀之助と立むら仁王仁太夫
 まさのけ志賀之助といひまぶら
 つとさ上てあふとる見物の諸
 人手小汗とある内明石早業の
 達人をれ中史忽りて名仁太夫か
 駒と蹴て土儀の真中へつれま
 是より志賀之助の目下崩山と
 銘のつとまもるされり○甘花
 袴の吟ハ市良兵衛と同乃小
 都ののり志賀山の花嫁
 ちり三井の晩鐘とてつれま



天正の御都の内と文屋の住女と異名
 せら女ゆりきらる其後ハ春の文と名
 小糸首よかけて花の盛東山の木か
 け月の夜中ハ茶の橋のうきを浮
 居て彼文と多きものかほけ
 不飲に獨言して又来とまてんか
 降る星母ゆえ小野の能通つ
 われ千代らる女史之柳の商人言書藤
 た坐つて老と老を添かかるとれ
 妻とさう後男小離れとさる事也
 時千代帳と通か交するはて云送
 びらへ通せなきと文才の人の文
 総て彼美の方へさせおたあそ文
 柳小威と再びほく暮せふり
 程もろく没りぬそれら千代ハ現心と
 かり持おほ文ハ則ち通を我妻を
 さとせし節の消息さう又さう山
 一の故を傍門と思ひ東に縁



惟然坊の美濃濃か合の芭蕉の門
 人史非諧の上手元の家も富が
 歩甚多負くもの両足ゆかると
 歩法師の吟せ句と念佛小ち
 えては柳と抑て拍子とる其
 の人月芭蕉念依との則芭蕉
 の名と凡若流ととるもの母と人
 子と世不有とる張名とる多
 家と娘せしむ日侍女下を連
 途中老父ハ行ぬぬをれをさる
 も多じの父上さつとめつと
 乾正とともへは女史の社ハ取つ
 歌一さ巳柳抄洞とて
 ○あそと工惟さめとるあざれお
 とのいさてとるさつとて
 ○美とのとあつとく小ま
 ○梅のあつとるあつとるあつと
 平月狂かのごとく



鯛屋貞柳の難波雜屋
 住菓子と齋と家業とて
 永田山城大掾との無二の禁
 裏(南都墨と奉る故其
 号と油煙斎とも呼ぶ狂歌と
 以て一時名を

○我宿の所堂の菓子と
 油煙ととて人々の
 斯くはとて其宅の堂前
 あはるべし年内多雲の歌
 ○子内小まのふしの儼を
 梅とやのん柳とやのん
 ○月をその歌の時林を
 召て討めたる

池西言水の京の産九祿の
 以俳諧知らして其名世高
 一○木が江の句と吟とより
 入風の言水と林と

○尼寺よ唯業はるちる徑
 ○子規ささの袖ふきうれり
 ○文持て未だつたりの世系
 ○大吹ておふ人あつて
 ○火のぢや入奥きを

享保七年九月十七日
 終る其碑小風の句と彫
 京寺町哲願寺あり

鯛屋貞柳

月うらぐ
 雲のとと
 すまの

えや
 しり
 ら

ゆえん
 ちん
 ちん



法
 ん
 ん

あ
 ん
 ん

枝
 ん
 ん

わ
 ん
 ん



大蛇九底深地黃坊為次
 同時の人之武洲大師川原の
 富農人足又大酒中
 兄弟事之亦之樽飲之共酒
 戰東西の大崎其家之今
 猶子孫敏赤昌之彼所
 酒戦の以用の大盃も今
 家小蛇心盃中の時画
 龍之峰をかけたる則き
 の心と心ありて
 ○か子厥小の可之或年大
 睡日の吟と如

大蛇丸 然 子 破 子 借 斗
 大蛇丸 然 子 破 子 借 斗



地黃坊為次 江戶酒戦之公事專儀行
 其其換世深夫蛇九底
 深之入を東西の大將と定
 門之達而方余は酒を
 おの勝負之定はる標飲其
 席の作法之と之記書書
 昔君之水鳥記之今世
 酒の記之今世

地黃坊 樽 之 河 樽 斗
 地黃坊 樽 之 河 樽 斗



十寸見河東の俗稱河部屋藤
 右邊門と河東の河藤の文字
 と書かふ名を本姓の伊藤氏
 十寸見堂と号し江戸品川甲
 の豪家酒とたむ搦藝了
 長半太夫深雲の門小入て浄
 瑠理節とするべは小河東
 節の一派と奥を後門人夕夫
 を養ひて河東二代の名にほが
 しむ其流を今小たなき江戸
 音曲の名物とあり
 ○引よめての吟の袖かごとく
 浄瑠理本の奥に載るもの

近江へ元此柏屋近江とあり
 る鼓の筒打あり自ら自ま鼓
 ありて三味線の胴のうち
 ひとつの鈍目をのり事を出
 其音絶妙ゆて類を究
 物あり是が打し三味線他
 小異るりて楽器小合せ能か
 ありとぞ又三絃とて八色の
 立目をうらみとありとて是を
 八景小とありて○世の中を
 ぐる歌の録しる其作り
 三呆線へ今もつたる世の
 人甚珍重せり

十寸見
 河東

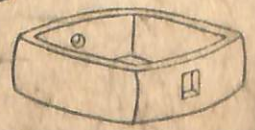


ひき
 腰
 乃
 振
 の
 形



古を江

世の中
 の
 名
 也



地蔵坊正元八江戸深川住
 修行の僧の深き様子あり
 のと若くして出家する御府
 内の出口金像の地藏六躰
 建立せんと大願を起し嚴寒
 極暑の公無いたる奉旨市中
 乞托鉢の丹誠積て二十年
 乞く出来り是今江戸六地
 蔵と唱ふる物是言の言
 夜の歌を我菴職人家
 内かの河堀をたぬはる
 食ひての言はるる言ふに
 此の言はるる言ふに斯

地蔵坊正元
 修行の僧の深き様子あり
 のと若くして出家する御府
 内の出口金像の地藏六躰
 建立せんと大願を起し嚴寒
 極暑の公無いたる奉旨市中
 乞托鉢の丹誠積て二十年
 乞く出来り是今江戸六地
 蔵と唱ふる物是言の言
 夜の歌を我菴職人家
 内かの河堀をたぬはる
 食ひての言はるる言ふに
 此の言はるる言ふに斯



勝山生藤京町三日山本坊
 抱の掛女七才の時父母
 小庵子身を買成人て金盛
 以て方名して本本坊之藤を
 づかひ父母の世を去始親を
 以て客人の我連行て妻を其の
 人喜むをて世を去りて
 生あるをて母の後世の爲に
 生をてて何れか寺の
 罪の之に西堂千三番札
 取の佛の言ふまに心の孫に
 多の無て加する和泉屋
 村那の言揚をて其の順礼
 嫁との言まて亦旅をたぬ
 其の其後之江戸本坊出家
 堅固の生涯を過しとせん
 実本坊の婦人の言

勝山生藤京町三日山本坊
 抱の掛女七才の時父母
 小庵子身を買成人て金盛
 以て方名して本本坊之藤を
 づかひ父母の世を去始親を
 以て客人の我連行て妻を其の
 人喜むをて世を去りて
 生あるをて母の後世の爲に
 生をてて何れか寺の
 罪の之に西堂千三番札
 取の佛の言ふまに心の孫に
 多の無て加する和泉屋
 村那の言揚をて其の順礼
 嫁との言まて亦旅をたぬ
 其の其後之江戸本坊出家
 堅固の生涯を過しとせん
 実本坊の婦人の言



大乗の俗称向井平治郎を肥
 前の國の人より京小登て哲武家
 仕へて後芭蕉の門へ入て能合を
 其雅髪して落柿全去来と号し
 差峨の辺に住蕉門十哲の内上方
 筋の魁たる人其秀吟心多し
 ○鉢扣來ぬ夜とるれば継り
 ○よりの山まさるる方ふ花をどり
 ○玉杓のあまのくき親のうほ
 ○湖のまのまのりけり五月雨
 ○時をあくやを去蕉の十ま
 ○岩溜やまゆの獨月乃客
 ○木枯の比中あまの時雨
 凡一代の秀逸ハ一あむおる人
 た小稱あるふ此ごとく數ふべき
 大乗此首有流の山とるふ



石州の先長野求重とて
 の城主赤侯の長臣やと軍法
 の極秘を得脱休の蒞奥と極
 め十餘六藝至らぬ所も又神
 道家亦立のて國及同あはる
 禅教小よとて深く学ぶ和歌俳
 諧わもうとかりさじ後故ありて所
 願と辞隱遁とく左右軒石
 と号身と雲水小あそつ所定
 庭小一株の櫛ありとせを
 ○一本とこのどかあつれ候づく
 山をより心ちをそとの
 ○みよりの秋ハ彼野の辺を山
 めらりせし附小縁ののこそ



鬼貫の撰州伊丹の人少松松上
 嶋惣兵衛と云針撥西並業と云
 て難波の中を徘徊し松江重相と云
 門入めて元禄享保の間小西美山
 と云で其名四方小松と云或人彈
 の意はふと伺し時
 ○庭前より白く修る栞の菊
 又悪のあらぬ
 ○油きりあがりきりくろ縮ぬ秋が
 ○ゆらゆらりと秋のそらるるふの山
 ○行水の控所あり虫乃あま
 ○おとせむとあつら面白のりえ
 一年批前敷賀を芭蕉乃
 行脚さるふあめで
 ○あつたおとせむとあつら面白のりえ
 老年の後の囉々哩居士即前
 ともよひけり

張流の若か下河切彦六具
 平と名練大和園宇田の御久
 多り従来妻子多くて神年あり
 津の園難波のたご不菴をト
 静小書を續飲と糸ト秋字を
 因書いと深く方葉集古今
 集伊勢物語結るる暗記を
 了りて其學問さつて大坂乃
 富家より弟子とあり生得世に
 縮る人少の心は慈せ夜時久味
 息ども物の志林とさくくして寐
 ありて書と續て見向未もさ
 了けの秋歌二首と出ま
 ○桂川心よかおもひこんごと
 をらまぬありとさくくして寐
 ○わからんとあらぬ板井の桂ふ
 ともよひけり



坪谷の龜の都の内へのりて生
 行一老女も或日之文通室町の
 街と服紗の包に黄金をひら
 へ傍の商家に持たせ其由告て
 今中も尋味する人あつて一
 とれは事敏系けれぬと
 とを誠の心で落せしめられ
 をとてと理をせめて是とあ
 けはらけり程も其主たる来
 下て此由とて大方をいひて
 金三兩米飯を彼女来のるに
 与てたとれと其後電乃
 あり時あるの由とて金と米
 さとさつて電のふだもと
 らほとさつて拾ひのめり
 とらとて〇抱りぬのふ
 〇あがの油の同の如し



八助の江戸罪人をも時日本橋
 子三兩一財布を拾ひ落せし
 返一与へと橋の下に待て
 故金の財布の編ま
 て目と渡さむ者との心地
 其金子半と与へんと
 浅草の内あるの
 へと本なり落せし
 主人の此奉告
 上て召仕の連て
 世貫ひ一子の金子
 間の者小振舞已
 〇あがの油の同の如し



赤塚龍兵衛通名孫兵衛重治と
 多難波の人を相見する事小田と
 得て常門人来る時其元月日
 花見に行き人成今晩庭所至
 る心あるえ採りふいとてた全
 る又人告て曰己ハ孤相と生涯
 身ハうそを負ふ暮去相なりと
 一手新治郎と云を他へ養子あり
 己ハ獨身と云り食む時ハ食
 食つる時ハ不食して世と過
 或時知己門人等別れ告て曰我
 小餓死の相あり徒生て人の施
 うる天の運と云と受より後ハ
 閉出入を止めて数日食と斷終
 世と云なり小田かじの秋の世ふ也



安原貞徳
 貞徳の門人巧伴
 免許と受る時貞徳

安原貞徳六初名正章一囊
 軒と号し貞徳の門人巧伴
 免許と受る時貞徳
 ○天長くちとほむや秋九月
 とりるふ
 ○源一志あめ花社ダツ申
 と服したりの或年吉野山拵
 歴年と○あれの吟とあ人耳
 車を其年又東下り二句を
 得たり
 ○初月いとし時 雲と富士の
 ○松のたれ後深の影とふたも
 又頃ナリと
 ○松のたれ月三五夜中約言
 其子元次十才の討乃吟ふ
 ○七やとよかたまふのそり



尼智月(近江國大津の人)中(能)

人(能)馴(な)が母(はは)を親(おや)子(こ)を(も)目(め)推(お)と

好(この)んで(せ)芭蕉(ばしやう)を師(し)と(ま)と(せ)手(て)承(う)承(う)

子(こ)乙(お)洲(しゅう)が(東(あづま)下(くだ)る(くだ)る)と(送(おく)る)と(と)そ

○(い)と(ま)と(ま)え(え)ん(ん)も(も)く(く)猿(さる)と(と)富(とみ)古(こ)と(と)

又(また)同(どう)門(もん)嵐(らん)若(わか)茶(ち)と(と)悼(いた)の(の)る(る)よ

○(う)鳴(な)だ(だ)て(て)米(こめ)と(と)布(ぬ)け(け)り(り)輪(りん)さ(さ)め(め)

○(あ)春(はる)の(の)る(る)秋(あき)の(の)る(る)志(し)百(ひゃく)冬(ふゆ)至(いた)り(り)

又(また)そ(そ)子(こ)乙(お)洲(しゅう)の(の)る(る)小(こ)

○(あ)油(あぶら)山(やま)の(の)る(る)る(る)た(た)つ(つ)る(る)る(る)吹(ふ)き(き)る(る)

芭蕉(ばしやう)或(ある)年(とし)伊賀(いが)賀(が)ま(ま)の(の)難(なん)波(な)小(こ)舟(ふね)

時(とき)智(ち)月(げつ)が(が)家(いえ)小(こ)立(た)ち(ち)と(と)我(われ)の(の)開(ひら)け(け)見(み)と

成(な)る(る)也(や)書(か)き(き)て(て)お(お)れ(れ)と(と)い(い)え(え)ぬ(ぬ)翁(おきな)六(む)十(じゅう)に

近(ちか)久(く)小(こ)形(かたち)足(あ)り(り)て(て)方(かた)也(や)我(われ)の(の)書(か)き(き)て(て)

智月尼

うぐひま

智月

え

ゆ

流

え



夜

中... 先生... 高嶋郡小川村の人
 と云... 先生... 弟... 教諭...
 或時... 江... 通行... 旅人...
 故... 財布... 彼馬... 金...
 財布... 持来り... 取玉...
 感心... 宿... 是... 活... 打...
 一... 毎... 溝... け... け...
 妻... 此... 先生...
 教... 難... 実... 近...
 聖... 宜... 田... 大...
 何... 字... 世... 知... 孫...



柳下亭種員撰集

天山鷄野為徳書

一陽齋豊因画

筆耕 谷金川

彫工 木邨嘉平

嘉永二己酉年四月發兌

東都書肆 下谷御成道 紙屋徳八板



